パネル文学展のご案内

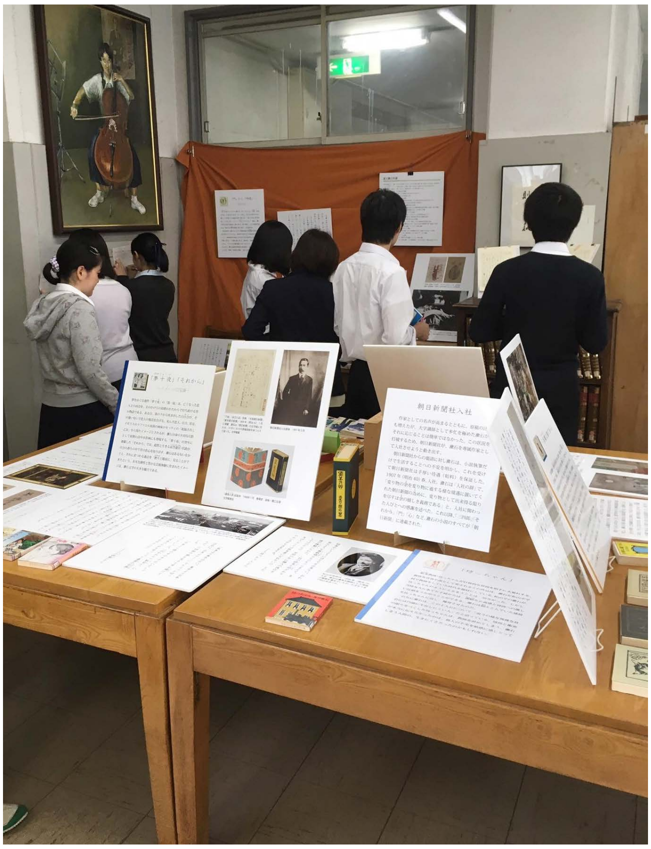
神奈川近代文学館では、学校図書館や文化祭での展示や授業のために、6種類のパネル文学展を用意しています。いずれも過去に当館で開催した展覧会を20～50点のパネル文学展に再構成したものです。2008年（平成20）に開始したパネル文学展の観覧者は累計367校、約29万人（2026.3現在）を数えています。貸し出しをご希望の方は、メールフォームまたはFAXでお申し込み下さい。（詳細は本案内2ページ目の【申込方法】を、各パネル展の全体見本はページ末尾をご覧下さい。）

図書室や文化祭で
文学展を開いてみませんか？
データ版はパワーポイントや
オンライン授業にも！
公共図書館等でもご利用ください。

〈パネル文学展メニュー〉
①夏目漱石展（データ版あり）
②中島敦展（データ版あり）
③森鷗外展
④太宰治展
⑤与謝野晶子展
⑥佐藤さとる『コロボックル物語』展

展示風景

2018年パネル文学展「夏目漱石」を開催した横須賀高校の展示風景とアンケート



原稿の表現とかを直したあとがたくさんあって、こういうのは初めて見たけど、おもしろいと思った。ー生徒

パネル展を観覧して、漱石の作品は漱石の人生の影響を大きく受けていたことが分かりました。ー生徒

順番に観ていくと漱石のエピソードや作品のあらましが概ね理解できるようになっており、コンパクトですが内容の濃いパネルであると思いました。人気のコミックの絵もあり、生徒たちの導入として良いですね。ー教員

作品は読んだことがありましたが、作者の性格や人生を知った上でもう一度読んでみたら、また違ったとらえ方ができそうです。こういった展示は大切だなと感じました。ー保護者

【貸出について】

（貸出期間）　1か月を目途に、協議のうえ決定。

（貸出料）　無料。

（パネル点数）　約30～50点（展示スペース等に応じて展示点数を減らすこともできます。）

（運搬）　宅配便、公用車など展示パネルの運搬にかかる経費は利用者が負担。
宅配便の概算額＝県内 往復約5,000円。
データ版（夏目漱石、中島敦のみ）はDVD-R（要返却）を送付します。

（報告）　返却時に、観覧者（利用者）数などの報告が必要です。会場スナップ写真や生徒さんの感想等もありましたら添えてください。

（その他）

＊展示会は開催者と県立神奈川近代文学館・公益財団法人神奈川文学振興会との共催とする。

＊関連図書などによる補足展示などアレンジ可。

＊文学館紹介パネル、ポスター等の掲示にご協力ください。

＊肖像、資料のパネル展示に必要な著作権者等の許諾手続きは文学館が処理済です。

＊数に限りがあるため、予定が決まりましたらお早めにお申込ください。

【申込方法】

下記内容をFAXでお送りいただくか、神奈川近代文学館ホームページ内「パネル文学展」に記載のメールフォーム（https://kanabun-or-jp.prm-ssl.jp/paneruten.html）からお申込下さい。
折り返し御連絡し、スケジュールなどについて打ち合わせを行います。

また、御不明の点は随時下記までお問い合わせ下さい。
県立神奈川近代文学館　担当：総務課・加藤
〒231-0862 横浜市中区山手町110　TEL 045-622-6666／Fax045-623-4841／event@kanabun.or.jp

---

神奈川近代文学館　パネル文学展利用希望FAX送信用紙

学校名など団体名：

御希望のパネル文学展名：

御希望の利用期間と運搬方法：

利用の目的（例・文化祭展示、高3国語科オンライン授業）：

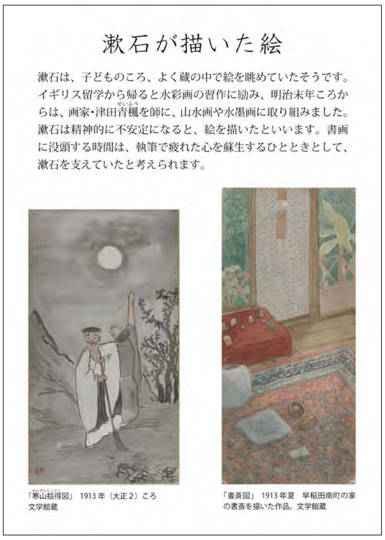
展示会場：　○をお付け下さい。
教室　図書館　常設の展示スペース　その他（　　　　　）

御担当者のお名前・職名：
電話番号：
メールアドレス：
その他：御質問など

パネル文学展　内容のご案内

1. 夏目漱石展　（データ版あり）

2016 年春開催の特別展「100 年目に出会う 夏目漱石」のダイジェスト版。肖像写真、原稿、絵画のほか、漱石の遺族から寄贈いただいた東京・早稲田南町の〈漱石山房〉に残された遺品などによって漱石の全体像をわかりやすく紹介します。

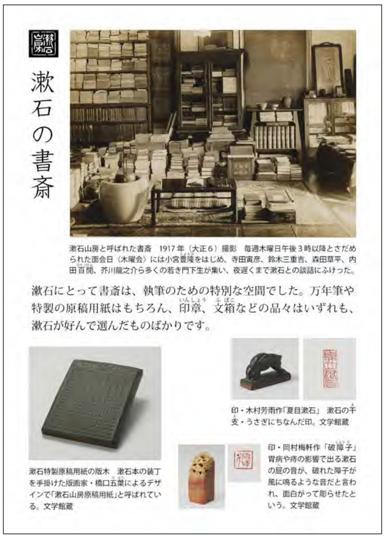


漱石が描いた絵

漱石は、子どものころ、よく蔵の中で絵を眺めていたそうです。イギリス留学から帰ると水彩画の習作に励み、明治末年ころからは、画家・津田青楓を師に、山水画や水墨画に取り組みました。漱石は精神的に不安定になると、絵を描いたといいます。書画に没頭する時間は、執筆で疲れた心を蘇生するひとときとして、漱石を支えていたと考えられます。

「寒山拾得図」 1913 年（大正 2）ころ
文学館蔵

「書斎図」 1913 年夏　早稲田南町の家の書斎を描いた作品。文学館蔵



漱石の書斎

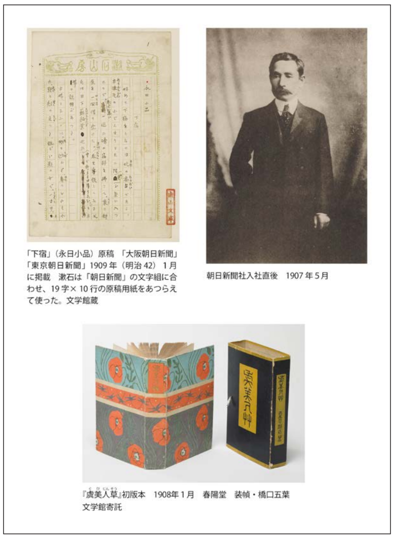
漱石山房と呼ばれた書斎　1917 年（大正 6）撮影　毎週木曜日午後 3 時以降とさだめられた面会日〈木曜会〉には小宮豊隆をはじめ、寺田寅彦、鈴木三重吉、森田草平、内田百閒、芥川龍之介ら多くの若き門下生が集い、夜遅くまで漱石との談話にふけった。

漱石にとって書斎は、執筆のための特別な空間でした。万年筆や特製の原稿用紙はもちろん、印章、文箱などの品々はいずれも、漱石が好んで選んだものばかりです。

漱石特製原稿用紙の版木　漱石本の装丁を手掛けた版画家・橋口五葉によるデザインで「漱石山房原稿用紙」と呼ばれている。文学館蔵

印・木村芳雨作「夏目漱石」　漱石の干支・うさぎにちなんだ印。文学館蔵

印・岡村梅軒作「破障子」　胃病や痔の影響で出る漱石の屁の音が、破れた障子が風に鳴るような音だと言われ、面白がって彫らせたという。文学館蔵



「下宿」（永日小品）原稿　「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」1909 年（明治 42） 1 月に掲載　漱石は「朝日新聞」の文字組に合わせ、19 字× 10 行の原稿用紙をあつらえて使った。文学館蔵

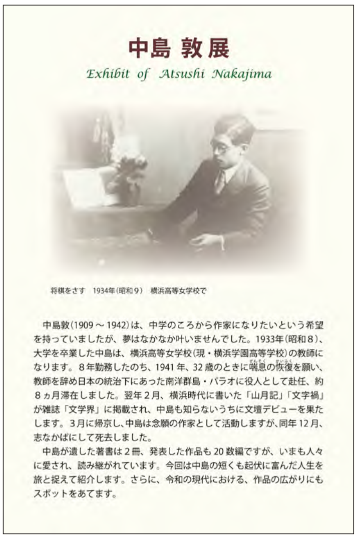
朝日新聞社入社直後　1907 年 5 月

『虞美人草』初版本　1908年 1 月　春陽堂　装幀・橋口五葉
文学館寄託

（夏目漱石展開催実績）
2008 ～ 2024 年度：144 校（旧版を含む、うちデータ版 20 校）／ 2024 年度開催：県立神奈川総合産業高等学校、県立大和西高等学校、県立金井高等学校、県立港北高等学校、玉川学園、横浜市立仲尾台中学校、東京都立桜修館中等教育学校、鎌倉市立手広中学校（開催順　以下同）

２. 中島敦展　（データ版あり）

2019 年秋開催の特別展「中島敦展－魅せられた旅人の短い生涯」のダイジェスト版。教科書にも取り上げられ、今日も多くの人々を惹きつけている「山月記」をはじめとする作品のほか、作家としてデビューするまでの軌跡や教師としての素顔も紹介しています。希望校には、中島敦が横浜高等女学校教員時代に作成した国語の試験問題（コピー・配布可）も合わせて提供します。



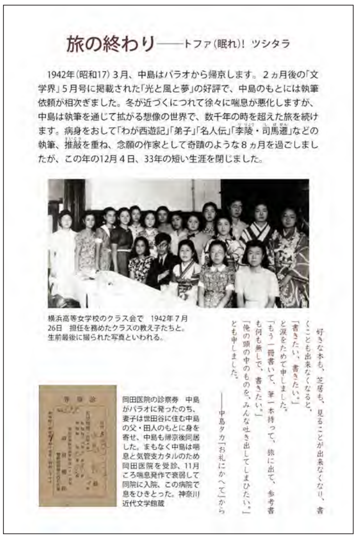
中島 敦展

Exhibit of Atsushi Nakajima

将棋をさす　1934年（昭和 9）　横浜高等女学校で

中島敦（1909 ～ 1942）は、中学のころから作家になりたいという希望を持っていましたが、夢はなかなか叶いませんでした。1933年（昭和 8）、大学を卒業した中島は、横浜高等女学校（現・横浜学園高等学校）の教師になります。8 年勤務したのち、1941 年、32 歳のときに喘息の恢復を願い、教師を辞め日本の統治下にあった南洋群島・パラオに役人として赴任、約 8 ヵ月滞在しました。翌年 2 月、横浜時代に書いた「山月記」「文字禍」が雑誌「文学界」に掲載され、中島も知らないうちに文壇デビューを果たします。3 月に帰京し、中島は念願の作家として活動しますが、同年 12 月、志なかばにして死去しました。

中島が遺した著書は 2 冊、発表した作品も 20 数編ですが、いまも人々に愛され、読み継がれています。今回は中島の短くも起伏に富んだ人生を旅と捉えて紹介します。さらに、令和の現代における、作品の広がりにもスポットをあてます。



旅の終わり——トファ（眠れ）！ ツシタラ

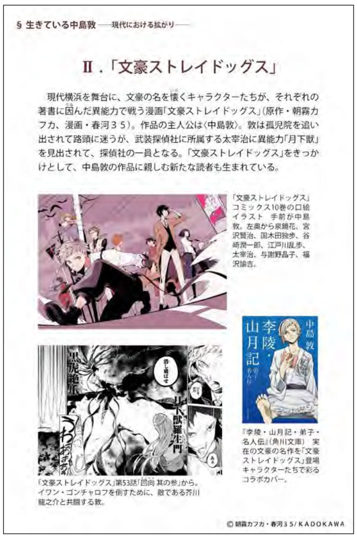
1942年（昭和17） 3 月、中島はパラオから帰京します。2 ヵ月後の「文学界」5 月号に掲載された「光と風と夢」の好評で、中島のもとには執筆依頼が相次ぎました。冬が近づくにつれて徐々に喘息が悪化しますが、中島は執筆を通じて拡がる想像の世界で、数千年の時を超えた旅を続けます。病身をおして「わが西遊記」「弟子」「名人伝」「李陵・司馬遷」などの執筆、推敲を重ね、念願の作家として奇蹟のような 8 ヵ月を過ごしましたが、この年の12月 4 日、33年の短い生涯を閉じました。

横浜高等女学校のクラス会で　1942年 7 月 26日　担任を務めたクラスの教え子たちと。生前最後に撮られた写真といわれる。

好きな本も、芝居も、見ることが出来なくなり、書くことも出来なくなると、「書きたい、書きたい。」と涙をためて申しました。「もう一冊書いて、筆一本持って、旅に出て、参考書も何も無しで、書きたい。」「俺の頭の中のものを、みんな吐き出してしまひたい。」とも申しました。

——中島タカ「お礼にかへて」から

岡田医院の診察券　中島がパラオに発ったのち、妻子は世田谷に住む中島の父・田人のもとに身を寄せ、中島も帰京後同居した。まもなく中島は喘息と気管支カタルのため岡田医院を受診、11月ころ喘息発作で衰弱して同院に入院、この病院で息をひきとった。神奈川近代文学館蔵



§ 生きている中島敦——現代における拡がり——

Ⅱ.「文豪ストレイドッグス」

現代横浜を舞台に、文豪の名を懐くキャラクターたちが、それぞれの著書に因んだ異能力で戦う漫画「文豪ストレイドッグス」（原作・朝霧カフカ、漫画・春河３５）。作品の主人公は〈中島敦〉。敦は孤児院を追い出されて路頭に迷うが、武装探偵社に所属する太宰治に異能力「月下獣」を見出されて、探偵社の一員となる。「文豪ストレイドッグス」をきっかけとして、中島敦の作品に親しむ新たな読者も生まれている。

「文豪ストレイドッグス」コミックス10巻の口絵イラスト　手前が中島敦。左奥から泉鏡花、宮沢賢治、国木田独歩、谷崎潤一郎、江戸川乱歩、太宰治、与謝野晶子、福沢諭吉。

「文豪ストレイドッグス」第53話「回向 其の参」から。イワン・ゴンチャロフを倒すために、敵である芥川龍之介と共闘する敦。

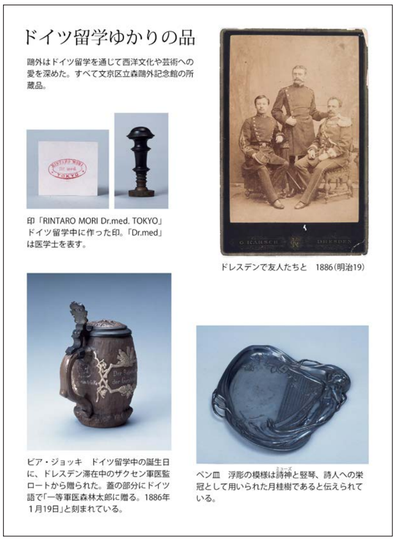
『李陵・山月記・弟子・名人伝』（角川文庫）　実在の文豪の名作を「文豪ストレイドッグス」登場キャラクターたちで彩るコラボカバー。

© 朝霧カフカ・春河３５/ KADOKAWA

（中島敦展開催実績）
2008 ～ 2024 年度：96 校（旧版を含む、うちデータ版 23 校）／ 2024 年度開催：県立横須賀高等学校、東京純心女子高等学校、捜真女学校、玉川学園、県立川崎高等学校、県立神奈川総合産業高等学校、川崎市立幸高等学校、県立永谷高等学校、県立横須賀南高等学校

３. 森鷗外展

2009 年（平成 21）に開催した「森鷗外展－近代の扉をひらく」のダイジェスト版。鷗外の肖像写真をはじめ、「舞姫」原稿、ドイツ留学ゆかりの品、子どもたちの写真、遺言書、著書初版本などで近代文学の世界を拓いた鷗外の生涯と作品世界を紹介します。



ドイツ留学ゆかりの品

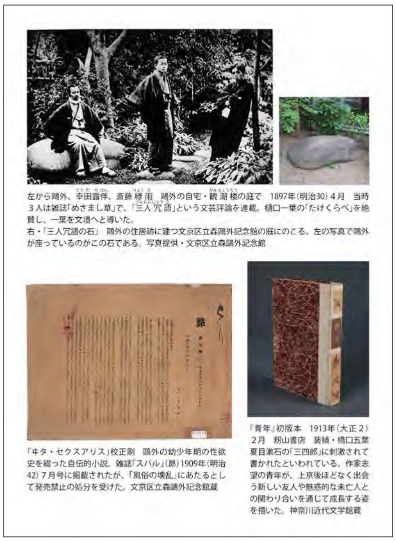
鷗外はドイツ留学を通じて西洋文化や芸術への愛を深めた。すべて文京区立森鷗外記念館の所蔵品。

印「RINTARO MORI Dr.med. TOKYO」ドイツ留学中に作った印。「Dr.med」は医学士を表す。

ドレスデンで友人たちと　1886（明治19）

ビア・ジョッキ　ドイツ留学中の誕生日に、ドレスデン滞在中のザクセン軍医監ロートから贈られた。蓋の部分にドイツ語で「一等軍医森林太郎に贈る。1886年1月19日」と刻まれている。

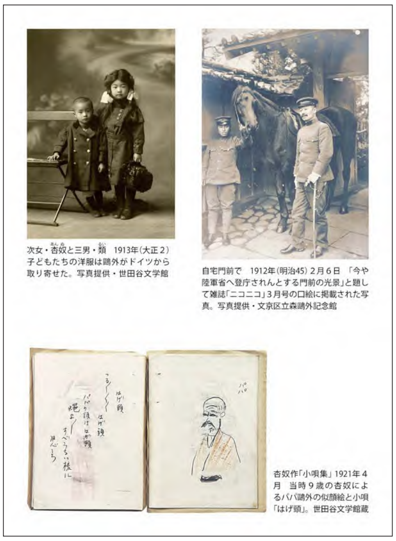
ペン皿　浮彫の模様は詩神と竪琴、詩人への栄冠として用いられた月桂樹であると伝えられている。



左から鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨　鷗外の自宅・観潮楼の庭で　1897年（明治30）4月　当時３人は雑誌「めさまし草」で、「三人冗語」という文芸評論を連載。樋口一葉の「たけくらべ」を絶賛し、一葉を文壇へと導いた。
右・「三人冗語の石」　鷗外の住居跡に建つ文京区立森鷗外記念館の庭にのこる。左の写真で鷗外が座っているのがこの石である。写真提供・文京区立森鷗外記念館

「ヰタ・セクスアリス」校正刷　鷗外の幼少年期の性欲史を綴った自伝的小説。雑誌「スバル」（昴）1909年（明治42）７月号に掲載されたが、「風俗の壊乱」にあたるとして発売禁止の処分を受けた。文京区立森鷗外記念館蔵

『青年』初版本　1913年（大正２）２月　籾山書店　装幀・橋口五葉　夏目漱石の「三四郎」に刺激されて書かれたといわれている。作家志望の青年が、上京後ほどなく出会う新しい友人や魅惑的な未亡人との関わり合いを通じて成長する姿を描いた。神奈川近代文学館蔵



次女・杏奴と三男・類　1913年（大正２）子どもたちの洋服は鷗外がドイツから取り寄せた。写真提供・世田谷文学館

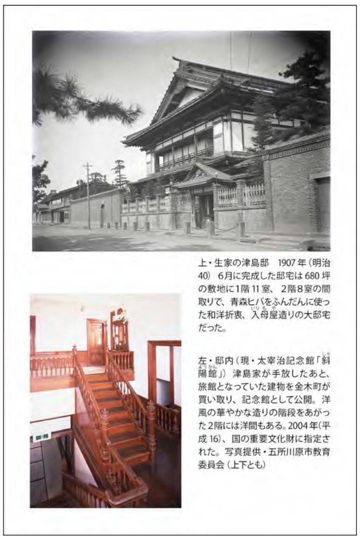
自宅門前で　1912年（明治45）２月６日　「今や陸軍省へ登庁されんとする門前の光景」と題して雑誌「ニコニコ」３月号の口絵に掲載された写真。写真提供・文京区立森鷗外記念館

杏奴作「小唄集」1921年４月　当時９歳の杏奴によるパパ鷗外の似顔絵と小唄「はげ頭」。世田谷文学館蔵

（森鷗外展開催実績）
2009 ～ 2024 年度：31 校、2 機関／ 2024 年度開催：県立神奈川総合産業高等学校

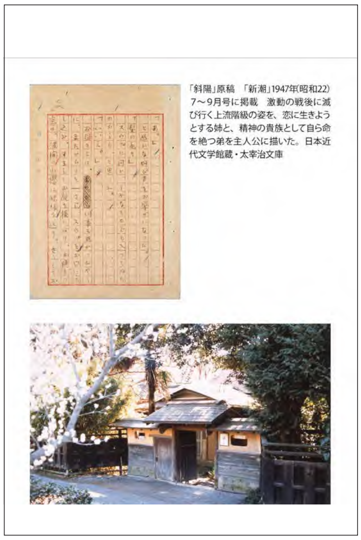
４. 太宰治展

2014 年（平成 26）春に開催した「太宰治展─語りかける言葉─」のダイジェスト版。没後 60 年以上の歳月を経てなお、多くの人々を惹きつける作品世界と、名作を生み出した苦闘の生涯を、肖像写真や原稿を通して紹介します。

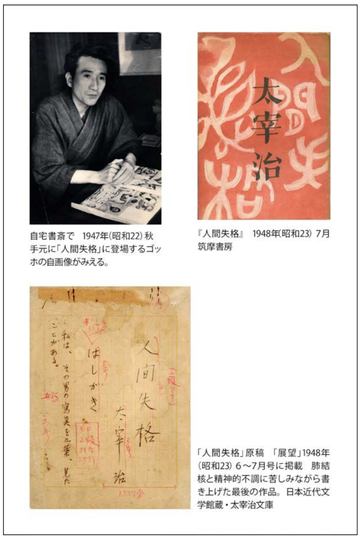


上・生家の津島邸　1907 年（明治40）６月に完成した邸宅は 680 坪の敷地に1階 11 室、２階８室の間取りで、青森ヒバをふんだんに使った和洋折衷、入母屋造りの大邸宅だった。

左・邸内（現・太宰治記念館「斜陽館」）津島家が手放したあと、旅館となっていた建物を金木町が買い取り、記念館として公開。洋風の華やかな造りの階段をあがった２階には洋間もある。2004 年（平成 16）、国の重要文化財に指定された。写真提供・五所川原市教育委員会（上下とも）



「斜陽」原稿　「新潮」1947年（昭和22）7～9月号に掲載　激動の戦後に滅び行く上流階級の姿を、恋に生きようとする姉と、精神の貴族として自ら命を絶つ弟を主人公に描いた。日本近代文学館蔵・太宰治文庫



自宅書斎で　1947年（昭和22）秋　手元に「人間失格」に登場するゴッホの自画像がみえる。

『人間失格』　1948年（昭和23）７月　筑摩書房

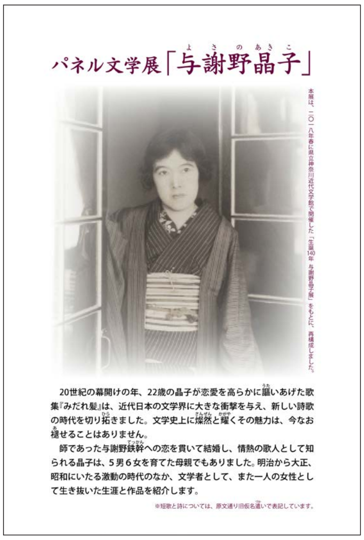
人間失格
太宰治
はしがき
私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

「人間失格」原稿　「展望」1948年（昭和23）６～7月号に掲載　肺結核と精神的不調に苦しみながら書き上げた最後の作品。日本近代文学館蔵・太宰治文庫

（太宰治展開催実績）
2014 ～ 2024 年度：51 校、1 機関／ 2024 年度開催：横浜市立岡津中学校、県立永谷高等学校、県立横浜氷取沢高等学校、二宮町立二宮中学校、横浜市立新羽中学校、県立横浜修悠館高等学校、県立神奈川総合産業高等学校、県立愛川高等学校、横浜女学院中学校高等学校、横浜雙葉中学高等学校

５. 与謝野晶子展

2018年春、生誕140年を記念して開催した「与謝野晶子展－こよひ逢ふ人みなうつくしき」のダイジェスト版。第一歌集『みだれ髪』で新しい詩歌の時代を築き上げ、幅広いジャンルで活躍した情熱的な生涯を、草稿、書簡、短冊、遺品、著書初版本などで紹介します。



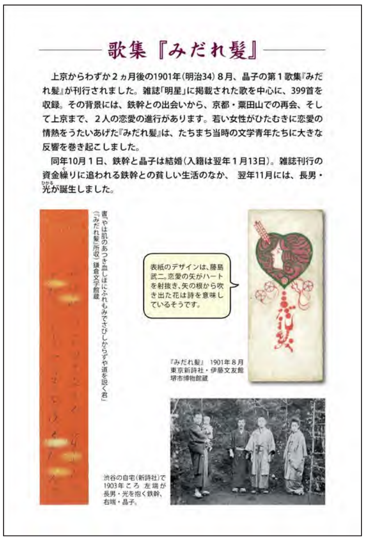
パネル文学展「与謝野晶子」

本展は、二〇一八年春に県立神奈川近代文学館で開催した「生誕140年 与謝野晶子展」をもとに、再構成しました。

20世紀の幕開けの年、22歳の晶子が恋愛を高らかに謳いあげた歌集『みだれ髪』は、近代日本の文学界に大きな衝撃を与え、新しい詩歌の時代を切り拓きました。文学史上に燦然と耀くその魅力は、今なお褪せることはありません。

師であった与謝野鉄幹への恋を貫いて結婚し、情熱の歌人として知られる晶子は、５男６女を育てた母親でもありました。明治から大正、昭和にいたる激動の時代のなか、文学者として、また一人の女性として生き抜いた生涯と作品を紹介します。

※短歌と詩については、原文通り旧仮名遣いで表記しています。



歌集『みだれ髪』

上京からわずか２ヵ月後の1901年(明治34) ８月、晶子の第１歌集『みだれ髪』が刊行されました。雑誌「明星」に掲載された歌を中心に、399首を収録。その背景には、鉄幹との出会いから、京都・粟田山での再会、そして上京まで、２人の恋愛の進行があります。若い女性がひたむきに恋愛の情熱をうたいあげた『みだれ髪』は、たちまち当時の文学青年たちに大きな反響を巻き起こしました。

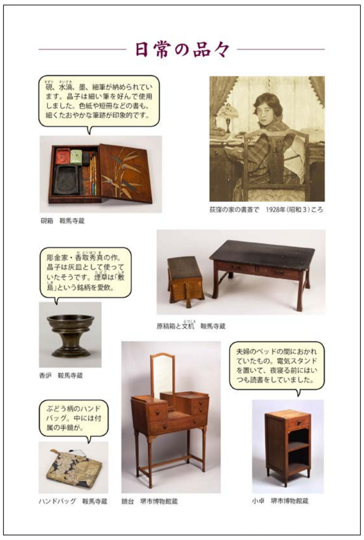
同年10月１日、鉄幹と晶子は結婚(入籍は翌年１月13日)。雑誌刊行の資金繰りに追われる鉄幹との貧しい生活のなか、 翌年11月には、長男・光が誕生しました。

書「やは肌のあつき血しほにふれもみでさびしからずや道を説く君」（『みだれ髪』所収）鎌倉文学館蔵

表紙のデザインは、藤島武二。恋愛の矢がハートを射抜き、矢の根から吹き出た花は詩を意味しているそうです。

『みだれ髪』 1901年８月
東京新詩社・伊藤文友館
堺市博物館蔵

渋谷の自宅(新詩社)で1903年ころ 左端が長男・光を抱く鉄幹、右端・晶子。



日常の品々

硯、水滴、墨、細筆が納められています。晶子は細い筆を好んで使用しました。色紙や短冊などの書も、細くたおやかな筆跡が印象的です。

硯箱　鞍馬寺蔵

荻窪の家の書斎で　1928年(昭和３)ころ

彫金家・香取秀真の作。晶子は灰皿として使っていたそうです。煙草は「敷島」という銘柄を愛飲。

香炉　鞍馬寺蔵

原稿箱と文机　鞍馬寺蔵

ぶどう柄のハンドバッグ。中には付属の手鏡が。

ハンドバッグ　鞍馬寺蔵

鏡台　堺市博物館蔵

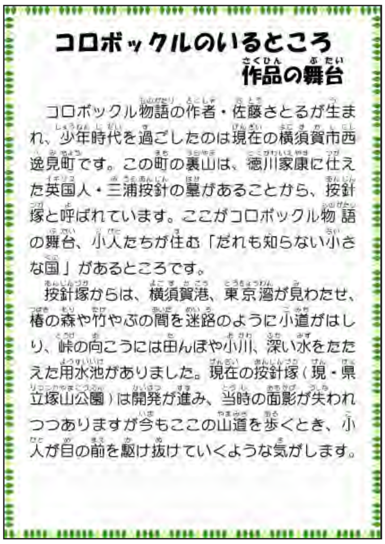
夫婦のベッドの間におかれていたもの。電気スタンドを置いて、夜寝る前にはいつも読書をしていました。

小卓　堺市博物館蔵

（与謝野晶子展開催実績）
2018 ～ 2024 年度：15 校／ 2024 年度開催：県立川崎高等学校、県立西湘高等学校、東京純心女子高等学校、フェリス女学院高等学校

６. 佐藤さとる「コロボックル物語」展

2007年夏開催の「佐藤さとる『コロボックル物語』展」をもとに製作。日本を代表する児童文学作家・佐藤さとるの生涯と「コロボックル物語」誕生の背景を、肖像写真や原稿などの資料で親しみやすく紹介しています。全体の内容についてはお問合せください。



コロボックルのいるところ
作品の舞台

コロボックル物語の作者・佐藤さとるが生まれ、少年時代を過ごしたのは現在の横須賀市西逸見町です。この町の裏山は、徳川家康に仕えた英国人・三浦按針の墓があることから、按針塚と呼ばれています。ここがコロボックル物語の舞台、小人たちが住む「だれも知らない小さな国」があるところです。

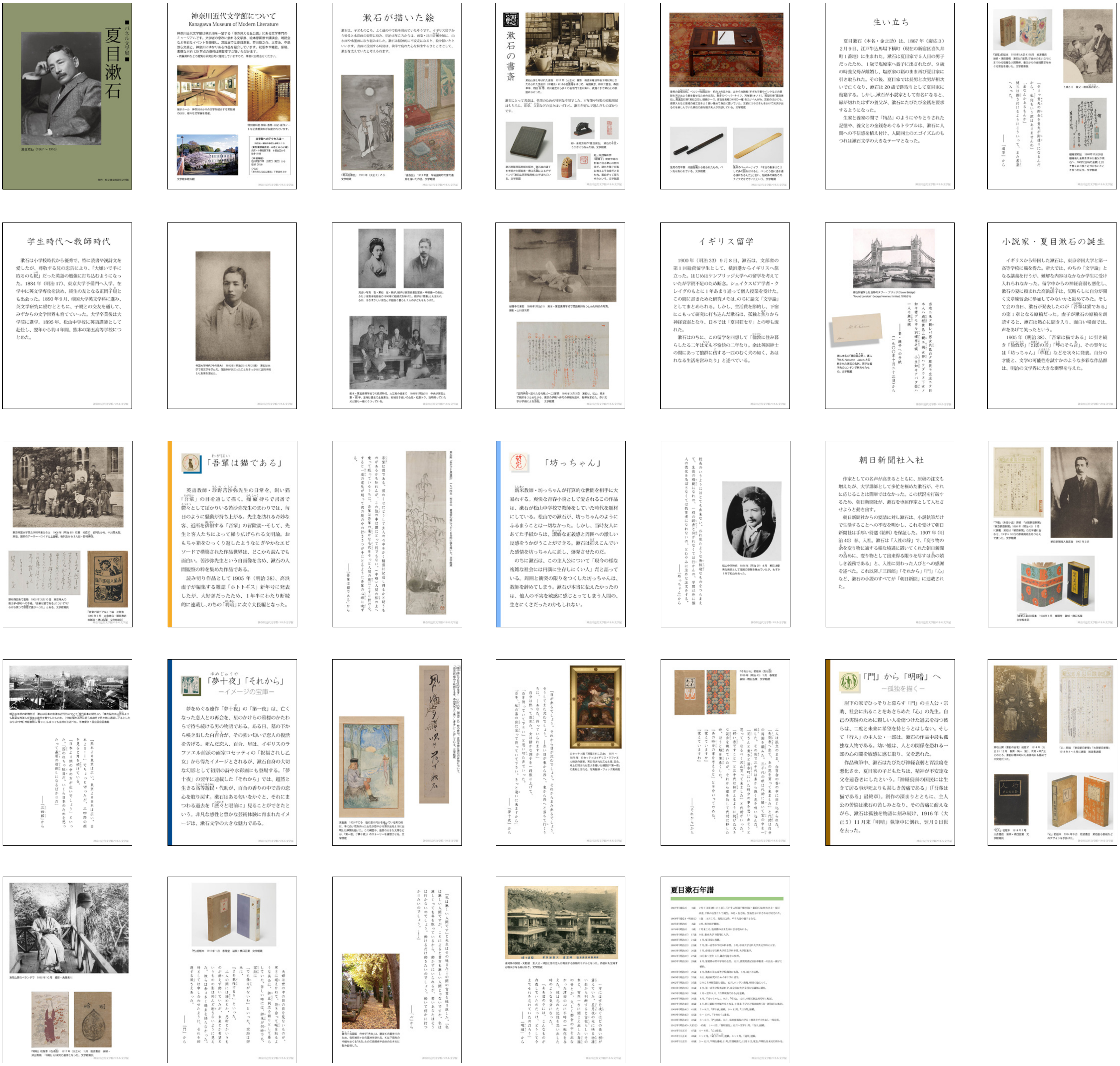
按針塚からは、横須賀港、東京湾が見わたせ、椿の森や竹やぶの間を迷路のように小道がはしり、峠の向こうには田んぼや小川、深い水をたたえた用水池がありました。現在の按針塚（現・県立塚山公園）は開発が進み、当時の面影が失われつつありますが今もここの山道を歩くとき、小人が目の前を駆け抜けていくような気がします。

（佐藤さとる展開催実績）
2013 ～ 2024 度：23 校、3 機関／ 2021~2024 年度開催：横浜富士見丘学園、横浜市中央図書館、横浜女学院中学校高等学校

※パネル展１～５については、ご希望があれば「文豪ストレイドッグス」パネルも合わせて提供。その他ワークシートもあります。

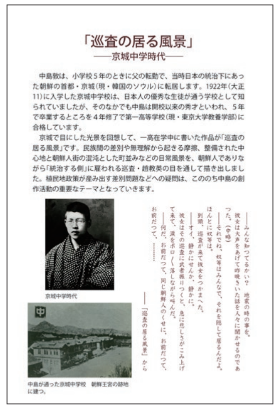
パネル文学展「夏目漱石」一例（基本構成）

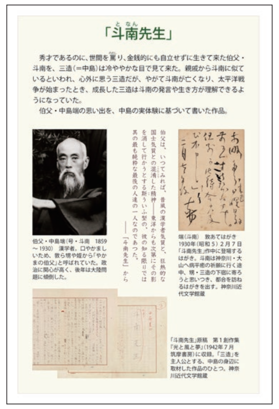
用途に合わせて、抜粋してお使い頂くことも可能です。横型もご提供できます。

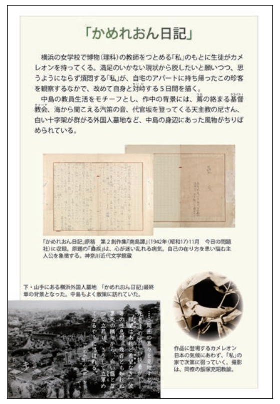


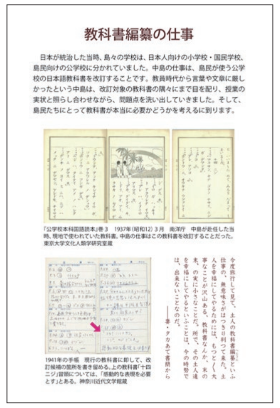
パネル文学展「中島敦」
一例（基本構成）

用途にあわせて、抜粋してお使いいただくことも可能です。



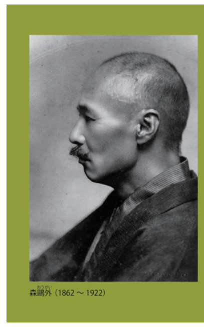






パネル文学展「森鷗外」
一例（基本構成）

用途にあわせて、抜粋してお使いいただくことも可能です。



森鷗外（1862～1922）

■パネル展■

「森鷗外」

製作・県立神奈川近代文学館

Ougai.Mori

生い立ち

鷗外（本名・森林太郎）は、幕末の1862年（文久2）、津和野藩の城下（現在の島根県津和野町）で、藩主に仕える医師の長男として生まれた。明治維新により藩制度が廃されると、鷗外は父に従って上京。医学を志し、1874年（明治7）入学規定年齢の14歳になるのを待たずに東京大学医学部予科に入学、最年少で本科を卒業した。

鷗外は、卒業後も医学研究を続けることを望んでいたが、長男として家を支えるために陸軍省に入り、軍医の職に就いた。1884年、軍の衛生学の調査及び研究のためドイツ留学を命じられ、8月24日、横浜港を出航した。

ドイツ留学と「舞姫」

鷗外はドイツで、最先端の医学を存分に吸収し、同時に「自由と美」という言葉に象徴されるヨーロッパの文化、芸術に強く魅了された。

1888年（明治21）9月、4年間の留学期間を終えて帰国。そしてそのわずか4日後、鷗外を追ってひとりのドイツ人女性が来日した。彼女の名はエリーゼ・ヴィーゲルト。小説「舞姫」の女主人公エリスのモデルとなった鷗外の恋人である。この時、鷗外には良家の令嬢との縁談もあり、周囲の懸命な説得で、エリーゼはドイツへ帰国した。

家族や国の期待に応えるためにエリーゼと別れ、鷗外の青春は終わった。しかしその一方で鷗外は、ひとりの人間として文学に生きることをひそかに決意。軍医としての勤務のかたわら、小説「舞姫」、訳詩集『於母影』など西洋の薫り高い作品を発表した。

メンザレエ号　鷗外が横浜から香港まで乗ったフランス船籍の帆船。蒸気機関も備えていた。後年鷗外が作詞した横浜市歌には、留学当時の想いがこめられている。写真提供・Association French Lines

横浜市歌

森　鷗外　作詞
南　能衛　作曲

わが日の本は島国よ、
朝日輝ぐ海に、
連り峙つ島々なれば、
あらゆる国より舟こそ通へ。

されば港の数多けれど、
此横浜に優るあらめや、
むかし思へば苫屋の煙、
ちらりほらりと立てりし処。

今は百舟百千舟、
泊る処ぞ、
見よや、
果なく、
栄えて行くらん御代を、
飾る宝も入り来る港。

我足音に驚かされてかえりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問いたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩われたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

――「舞姫」から

「舞姫」ゆかりのモノグラム　ドイツでは、婚約者の女性がハンカチなどに男性のイニシャルを刺繍するため、モノグラム（刺繍用の型）を作る習慣があった。

ロマンの開花

鷗外は軍医として日清、日露戦争に従軍し、1907年（明治40）には軍医として最高位である軍医総監に昇進した。

軍医としての職務は多忙で、小説などの執筆は帰宅後の深夜に限られていたにもかかわらず、1916年（大正5）に退官するまでの35年間、鷗外は旺盛な作家活動を繰り広げた。「スバル」「三田文学」を主な舞台に、反自然主義の立場から挑んだ自伝的性欲史「ヰタ・セクスアリス」、今日、ともに文豪と並び称される夏目漱石の存在を意識した「青年」などを執筆、多彩な文学世界を一気に開花させた。また、石川啄木、永井荷風、与謝野晶子ら若い世代の文学者たちとも積極的に交流し、敬愛を集めた。

南山の　たたかいの日に
袖口の　こがねのぼたん
ひとつおとしつ
その扣鈕惜し

べるりんの　都大路の
ぱっさあじゅ　電燈あおき
店にて買いぬ
はたとせまえに

えぽれっと　かがやきし友
こがね髪　ゆらぎし少女
はや老いにけん
死にもやしけん

――「扣鈕」（『うた日記』）から

注・①　アーケードの商店街
注・②　20年前に
注・③　肩章
＊「扣鈕」は、日露戦の戦場でドイツ留学時代のボタンを落としてしまった悲しみに、過去への思いをこめた詩。

「青年」の舞台となった明治時代の東京　左は日本橋、右は新橋駅。写真提供・国立国会図書館

田舎から出て来た純一は、小説で読み覚えた東京詞を使うのである。丁度不慣な外国語を使うように、一語一語考えて見て口に出すのである。そしてこの返事の無難に出来たのが、心中で嬉しかった。

雑巾を掴んで突っ立った、ませた、おちゃっぴいな小女の目に映じたのは、色の白い、卵から孵ったばかりの雛のような目をしている青年である。薩摩絣の袷に小倉の袴を穿いて、同じ絣の袷羽織を着ている。被物は柔かい茶褐の帽子で、足には紺足袋に薩摩下駄を引っ掛けている。当前の書生の風俗ではあるが、何から何まで新しい。これで昨夕始めて新橋に着いた田舎者とは誰にも見えない。

――「青年」から

鷗外と子供たち

いつもは鋭い眼光を放つ三角の眼尻を下げ、ほほえむ「パッパ」。鷗外の子どもたちは皆、限りなく優しい父親の思い出を、それぞれの回想録にのこしている。そしてその思い出の多くが、父が憧れてやまない西欧の香りにつつまれていた。ドイツから取り寄せた服のレースの匂い、膝で聞かせてもらったグリム童話、父が口ずさむドイツの歌。於菟、茉莉、不律、杏奴、類…子どもたちの名は「世界で通用するように」と付けられたものである。鷗外は、再びはかなわぬであろう洋行の夢を子どもたちに託し、全員が西洋の地を踏むことを願っていたという。

鷗外が子供や孫に付けた名前

長男	於菟	(Otto)
長女	茉莉	(Marie)
次男	不律	(Fritz)
次女	杏奴	(Anne)
三男	類	(Louis)
孫	眞章	(Max)
孫	富	(Tom)
孫	礿	(Jaques)

歴史小説と史伝

陸軍大将・乃木希典が明治天皇に殉死したことをきっかけに書かれた「興津弥五右衛門の遺書」で、鷗外は、殉死を主君への忠誠心として讃美した。しかし、翌年発表した「阿部一族」では、殉死を巡る侍たちの苦しみを描き、歴史小説の分野でも人間の内面に深く踏み込んだ、現代に通じる作品世界をひらいた。鷗外の歴史小説の多くは史実に基づいたものだが、史実から離れ「夢のような物語を夢のように思い浮かべ」て描いた、「山椒大夫」「高瀬舟」などの叙情的作品も生み出されている。1916年（大正5）陸軍退官の年から、「澀江抽斎」「北条霞亭」など、「史伝」と呼ばれる作品を執筆する。史料からの引用を淡々と繰り返す「史伝」の表現は、歴史に埋もれた無名人の生活を見事によみがえらせ、高い評価を得ている。

「お母あ様お母あ様」と呼び続けている姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走って行く。「もう呼ぶな」と宮崎が叱った。「水の底の鱗介には聞えても、あの女子には聞えぬ。女子共は佐渡へ渡って粟の鳥でも逐わせられることじゃろう。」

姉の安寿と弟の厨子王とは抱き合って泣いている。故郷を離れるも、遠い旅をするも母と一しょにすることだと思っていたのに、今料らずも引き分けられて、二人はどうして好いかわからない。ただ悲しさばかりが胸に溢れて、この別が自分達の身の上をどれだけ変らせるか、その程さえ弁えられぬのである。

――「山椒大夫」から

遺　言

晩年の鷗外は、長い間仕えた国の有様や、官僚としての人生に虚しさを感じていたという。

陸軍退職後は執筆に専心するが、翌年末には軍隊勤務とはまったく異なる、帝室博物館総長、図書頭（宮中の図書館の長）に就任し、博物館蔵書目録の編纂や天皇の諡、元号の考証に自ら着手した。この時鷗外は、腎臓を病んでいたが、「自彊不息（みずからつとめてやまず）」を自戒の言葉として、倒れるまで勤めた。

1922年（大正11）6月15日から欠勤し7月9日午前7時死去。遺言書にのこる「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」の言葉は、官僚としての肩書きから解放され、石見（故郷・津和野）で生まれた、ひとりのただの人間として死にたいという鷗外の強い願いの表れである。

森鷗外年譜

Ougai.Mori

パネル文学展「太宰治」
一例（基本構成）

用途にあわせて、抜粋してお使いいただくことも可能です。

■パネル展■

太宰治

太宰 治（1909～1948）　撮影・渡辺好章

製作・県立神奈川近代文学館

幼年時代から上京まで

太宰治（本名・津島修治）は1909年（明治42）6月19日、津島源右衛門、夕子の六男として青森県北津軽郡金木村（現在の五所川原市）に生まれた。津島家は県内有数の大地主で、多忙な父、病弱な母との触れあいは少なかったが、母親がわりの叔母・キヱや子守のタケが語り聞かせてくれる昔話が大好きな子どもだった。尋常小学校時代には、成績優秀で、その作文力では教師を驚かせていた。

1923年（大正12）、県立青森中学校（旧制）に進む。このころから創作に熱中し、「校友会誌」に最初の小説「最後の太閤」を発表。芥川龍之介や菊池寛の作品に親しみ、級友たちと同人誌「蜃気楼」をつくり、作家への憧れをつのらせた。

1927年（昭和2）には、官立弘前高等学校に入学。この年7月の芥川龍之介の自殺に衝撃を受け、純文学的世界への耽溺を深めるが、その一方でプロレタリア文学の影響から、同人誌「細胞文芸」に、津島家を悪徳地主に見立てた小説「無間奈落」を発表した。3年生の12月、試験の前夜に睡眠薬による自殺未遂事件を起こす。この自殺の原因は、地主の家に生まれたことへの苦悩や芸妓との交際による学業成績の不振だったといわれている。

恍惚と不安の時代

太宰治（本名・津島修治）は1909年（明治42）6月19日、津島源右衛門、夕子の六男として青森県北津軽郡金木村（現在の五所川原市）に生まれた。津島家は県内有数の大地主で、多忙な父、病弱な母との触れあいは少なかったが、母親がわりの叔母・キヱや子守のタケが語り聞かせてくれる昔話が大好きな子どもだった。尋常小学校時代には、成績優秀で、その作文力では教師を驚かせていた。

1923年（大正12）、県立青森中学校（旧制）に進む。このころから創作に熱中し、「校友会誌」に最初の小説「最後の太閤」を発表。芥川龍之介や菊池寛の作品に親しみ、級友たちと同人誌「蜃気楼」をつくり、作家への憧れをつのらせた。

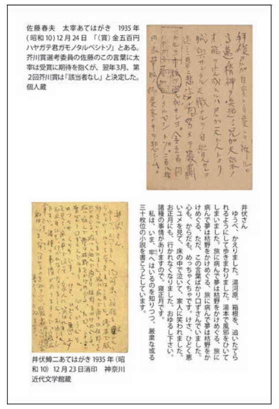
1927年（昭和2）には、官立弘前高等学校に入学。この年7月の芥川龍之介の自殺に衝撃を受け、純文学的世界への耽溺を深めるが、その一方でプロレタリア文学の影響から、同人誌「細胞文芸」に、津島家を悪徳地主に見立てた小説「無間奈落」を発表した。3年生の12月、試験の前夜に睡眠薬による自殺未遂事件を起こす。この自殺の原因は、地主の家に生まれたことへの苦悩や芸妓との交際による学業成績の不振だったといわれている。

「ここを過ぎて悲しみの市。」

友はみな、僕からはなれ、かなしき眼もて僕を眺める。友よ、僕と語れ、僕を笑え。ああ、友はむなしく顔をそむける。友よ、僕に問え。僕はなんでも知らせよう。僕はこの手もて、園を水にしずめた。僕は悪魔の傲慢さもて、われよみがえるとも園は死ね、と願ったのだ。もっと言おうか。ああ、けれども友は、ただかなしき眼もて僕を眺める。

大庭葉蔵はベッドのうえに坐って、沖を見ていた。沖は雨でけむっていた。

――「道化の華」から



再出発

退院後、初代と別れた太宰は、1938年（昭和13）9月、新しい人生を始めるため山梨県の御坂峠に滞在した。この転地は、井伏鱒二に勧められたもので、富士山を望む部屋で過ごした日々からは、名作「富嶽百景」が生まれている。

翌年1月、井伏の紹介で石原美知子と結婚。太宰は、教養高く、芸術家としての自分を深く愛してくれる妻を得た。甲府市御崎町の新居で、初めて妻に口述筆記させた作品「黄金風景」をはじめ、「女生徒」「畜犬談」「春の盗賊」など、日常の小さな出来事に光をあてた、清新な作品が生み出された。1939年秋には、東京・三鷹に転居。畑に囲まれた小さな借家で、午前中からこつこつと執筆を続け、リズミカルな語りを生かした「走れメロス」「駈込み訴え」など、太宰治の代表作となる作品を書き上げた。

1941年には長女・園子が誕生。故郷の家族と和解し、妻子を連れて病床の母を見舞うこともできた。戦争が激化するまでの日々は、文学者として家庭人として最も充実したものとなった。

明日もまた、同じ日が来るのだろう。幸福は一生、来ないのだ。それは、わかっている。けれども、きっと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいのでしょう。（中略）

おやすみなさい。私は、王子さまのいないシンデレラ姫。あたし、東京の、どこにいるか、ごぞんじですか？ もう、ふたたびお目にかかりません。

――「女生徒」から

申し上げます。申し上げます。旦那さま。あの人は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。

はい、はい。落ちついて申し上げます。あの人を、生かして置いてはなりません。世の中の仇です。はい、何もかも、すっかり、全部、申し上げます。

――「駈込み訴え」から

ジョット画「ユダの接吻」（イタリア・スクロヴェーニ礼拝堂壁画）
太宰は、聖書の〈ユダの裏切り〉に着想を得て、「駈込み訴え」を書いた。

その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬って、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労恢復と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言って居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！ メロス。

――「走れメロス」から

無頼派の旗手として

太宰は、結核の初期症状があったため戦地へは行かず、太平洋戦争中も執筆に打ち込み、「右大臣実朝」「津軽」「新釈諸国噺」「お伽草紙」など数々の傑作を書いている。

1945年（昭和20）、終戦を疎開先の津軽で迎え、太宰は、自分はあくまでも、権威に拠らない無頼派（自由思想家）でありたいと宣言。1946年11月、津軽から三鷹の自宅へ戻ると、戦後の混乱が続く東京で「ヴィヨンの妻」「斜陽」などの作品を発表。無頼派の旗手として多くの読者の熱狂的な支持を受けた。しかし、それから死までの1年半、太宰は、執筆や人間関係による心労に苦しむことになる。1948年、若き日の心中や薬物中毒などの体験をもとに「人間失格」の執筆を開始。過労により結核を悪化させ、血を吐きながら執筆を続け、純粋さ故に世の中をうまく生きることができない男の苦悩を描いた。6月、「人間失格」が完成した翌月、心身ともに疲れ果てた太宰は、仕事場近くの玉川上水に愛人とともに入水し、39年の生涯を閉じた。

自分の弱さを決して隠さず、読者に親しく語りかける太宰の作品は、没後60年を経てなお多くの人びとに愛されている。

母の苦情が一段落すると、こんどは、五歳の女の子が、もう壕から出ましょう、と主張しはじめる。これをなだめる唯一の手段は絵本だ。桃太郎、カチカチ山、舌切雀、瘤取り、浦島さんなど、父は子供に読んで聞かせる。

この父は服装もまずしく、容貌も愚なるに似ているが、しかし、元来ただものでないのである。物語を創作するというまことに奇異なる術を体得している男なのだ。

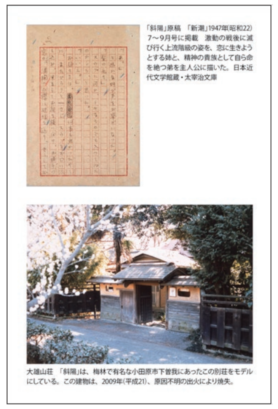
ムカシ　ムカシノオ話ヨ

などと、間の抜けたような妙な声で絵本を読んでやりながらも、その胸中には、またおのずから別個の物語が醞醸せられているのである。

――「お伽草紙」から

もう、この頃では、あのトカトントンが、いよいよ頻繁に聞え、新聞をひろげて、新憲法を一条一条熟読しようとすると、トカトントン、局の人事に就いて伯父から相談を掛けられ、名案がふっと胸に浮んでも、トカトントン、あなたの小説を読もうとしても、トカトントン、こないだこの部落に火事があって起きて火事場に駈けつけようとして、トカトントン、伯父のお相手で、晩ごはんの時お酒を飲んで、も少し飲んでみようかと思って、トカトントン、もう気が狂ってしまっているのではなかろうかと思って、これもトカトントン、自殺を考え、トカトントン。

――「トカトントン」から



朝、食堂でスウプを一さじ、すっと吸ってお母さまが、

「あ。」

と幽かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スウプに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ。」

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スウプをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スウプを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。

――「斜陽」から

自分は、皆にあいそがいいかわりに、「友情」というものを、いちども実感した事が無く、堀木のような遊び友達は別として、いっさいの附き合いは、ただ苦痛を覚えるばかりで、その苦痛をもみほぐそうとして懸命にお道化を演じて、かえって、へとへとになり、わずかに知合っているひとの顔を、それに似た顔をさえ、往来などで見掛けても、ぎょっとして、一瞬、めまいするほどの不快な戦慄に襲われる有様で、人に好かれる事は知っていても、人を愛する能力に於いては欠けているところがあるようでした。

――「人間失格」から

――元来が幅のせまい人間の私は、ただ君の才能に敬伏していましたので、はらはらさせられながらも君は悩みを突破して行けるものと思っておりました。しかしもう及ばない。私の愚かであったために、君は手まといを感じていたかもしれません。どうしようもないことですが、その実は恥じ入ります。左様なら。

――井伏鱒二　太宰への弔辞から

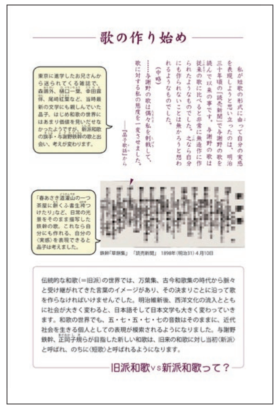
太宰治の生涯

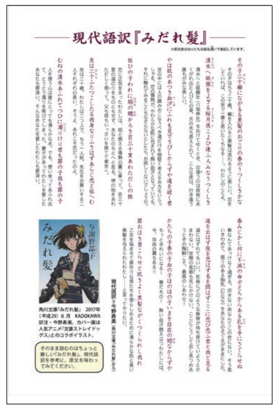
〈　〉内は、作品を発表した雑誌の名前、または本を出版した出版社。

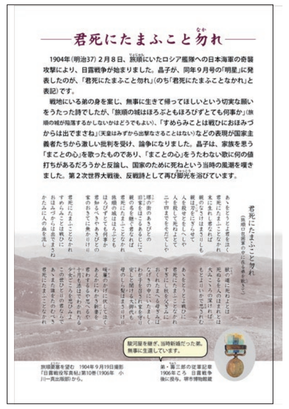
1909年（明治42）	0歳	6月19日、父・津島源右衛門、母・夕子の第十子六男として青森県北津軽郡金木村に出生。戸籍名は津島修治。
1916年（大正5）	7歳	4月、金木第一尋常小学校に入学。
1922年（大正11）	13歳	3月、小学校卒業。4月、明治高等小学校に入学し1年間通学。12月、父が貴族院議員に当選。
1923年（大正12）	14歳	3月、父病没。4月、県立青森中学校に入学。
1925年（大正14）	16歳	3月、青森中学校「校友会誌」に最初の創作「最後の太閤」を発表。このころから作家に対する憧れが強まる。
1927年（昭和2）	18歳	3月、青森中学校4年修了。4月、官立弘前高等学校に入学。7月、芥川龍之介の自殺に衝撃を受ける。近松門左衛門、泉鏡花、芥川らの文学に心酔する。
1929年（昭和4）	20歳	1月、弟・礼治急逝。12月、2学期試験前夜に、カルモチンで昏睡状態になる。
1930年（昭和5）	21歳	4月、東京帝国大学仏文科に入学。5月、井伏鱒二を訪ね師事する。9月30日、青森で親しかった小山初代が上京。その後、長兄・文治は分家除籍を条件に初代との結婚を認める。11月、女給・田辺あつみと鎌倉腰越町小動岬で薬物心中を図る。12月、初代と仮祝言。
1934年（昭和9）	25歳	12月、今官一、檀一雄、中原中也、山岸外史らと「青い花」創刊、「ロマネスク」を発表。
1935年（昭和10）	26歳	3月、東京帝大は卒業の見込みが立たず、都新聞社の入社試験にも失敗。鎌倉で自殺未遂。4月、急性盲腸炎手術後、鎮痛のためのパビナールが習慣化する。5月、「日本浪曼派」に参加、「道化の華」を発表。8月、「逆行」が第1回芥川賞に落選。9月、東京帝大を除籍。
1936年（昭和11）	27歳	2月、パビナール中毒治療のため済生会芝病院に入院、完治しないまま退院。6月、第1創作集『晩年』〈砂子屋書房〉。7月、『晩年』出版記念会。8月、第3回芥川賞の落選に衝撃を受ける。10月、東京武蔵野病院閉鎖病棟に収容される。
1937年（昭和12）	28歳	1月、「二十世紀旗手」〈改造〉。3月、初代の不倫を知り、谷川岳山麓で初代と心中未遂。初代と離別。
1938年（昭和13）	29歳	9月、山梨県御坂峠の天下茶屋に赴く。同月18日、見合いする。11月、婚約。甲府竪町に下宿。
1939年（昭和14）	30歳	1月、甲府御崎町に移転、石原美知子と結婚。2月、「富嶽百景」〈文体〉。4月、「黄金風景」が国民新聞短篇小説コンクール当選。「女生徒」〈文学界〉。9月、東京三鷹に移転。
1940年（昭和15）	31歳	原稿依頼が増え、次々に佳作を発表。1月、「春の盗賊」〈文芸日本〉。2月、「駈込み訴え」〈中央公論〉。5月、「走れメロス」〈新潮〉。6月、『女の決闘』〈河出書房〉。「盲人独笑」〈新風〉。
1941年（昭和16）	32歳	1月、「東京八景」〈文学界〉。6月、長女・園子誕生。7月、『新ハムレット』〈文芸春秋社〉。8月、10年ぶりで帰郷。9月ころ、太田静子らの訪問を受ける。11月、胸部疾患で徴用免除となる。12月、太平洋戦争開戦。
1942年（昭和17）	33歳	10月、妻子と帰郷。「花火」〈文芸〉が時局柄全文削除される。
1943年（昭和18）	34歳	1月、「故郷」〈新潮〉。6月、「帰去来」〈八雲〉。9月、『右大臣実朝』〈錦城出版社〉。
1944年（昭和19）	35歳	「新釈諸国噺」〈新潮〉。3月、「散華」〈新若人〉。5～6月、「津軽」の執筆のため津軽旅行。7月、先妻・小山初代が病没。8月、長男・正樹誕生。11月、「雲雀の声」原稿など出版間際に焼失。『津軽』〈小山書店〉。
1945年（昭和20）	36歳	1月、『新釈諸国噺』〈生活社〉。3月、妻子は甲府に疎開。4月、空襲に遭い甲府へ疎開。7月、津軽へ再疎開。8月、終戦。9月、『惜別』〈朝日新聞社〉。10月、『お伽草紙』〈筑摩書房〉。
1946年（昭和21）	37歳	6月、「冬の花火」〈展望〉。7月、祖母・イシ逝去。9月、「春の枯葉」〈人間〉。11月、三鷹の家に帰る。
1947年（昭和22）	38歳	1月、「トカトントン」〈群像〉。2月、下曽我に太田静子を訪ねる。「斜陽」を起稿。3月、山崎富栄と知り合う。次女・里子誕生。「ヴィヨンの妻」〈展望〉。7月、「斜陽」〈新潮　～10月〉。11月、太田静子に女児誕生、治子と命名。12月、『斜陽』〈新潮社〉がベストセラーになる。
1948年（昭和23）	39歳	3月、「人間失格」の執筆に専念。「如是我聞」〈新潮　～7月〉。5月、「朝日新聞」の連載小説「グッド・バイ」を起稿。「桜桃」〈世界〉。6月、「人間失格」〈展望　～8月〉。同月13日、夜半ころ山崎富栄と玉川上水に入水。21日、自宅で告別式。法名・文綵院大猷治通居士。7月、三鷹の禅林寺に埋葬。

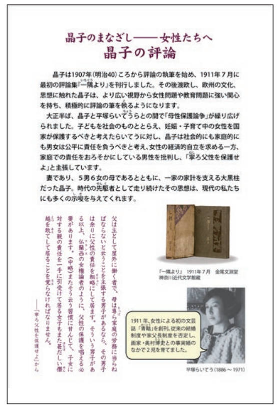
パネル文学展「与謝野晶子」
一例（基本構成）

用途にあわせて、抜粋してお使いいただくことも可能です。









パネル文学展「佐藤さとる『コロボックル物語』」
一例（基本構成）

用途にあわせて、抜粋してお使いいただくことも可能です。

コロボックルってなんのこと？

日本には、昔から二つの小人の話が伝わっています。アイヌ民族に伝わるコロボックルと、古事記に出てくる少彦名命（すくなひこなのみこと）の伝説です。コロボックルと少彦名命には、カガイモという実のさやを舟にすることなど、共通点があって、もとは同じ小人の一族だった可能性があります。

コロボックル物語に登場する小人は、地元の人たちには「こぼしさま」と呼ばれ、先祖は「スクナヒコサマ」、別名・コロボウシとかコロボッチともいわれています。アイヌ伝説のコロボックルや少彦名命に関係する、大昔から日本に住む小人の子孫であることはまちがいありません。

身長は約３センチ、あまりにすばしっこいので人間の目にとまらず、話しているのは日本語ですが、早口すぎて、ふつうの人には「ルルルル……」としか聞こえません。

小山をたずねてからしばらくたったころ、ぼくは、おかしなことがときどきあるのに気がついた。

ポケットの中のものをとりだすときに、なにかがいっしょにこぼれ落ちたような気がするのだ。小さな黒いかげが、ぼくの目のはしをかすめて、足もとに消えていくような感じだった。それはほんのいっしゅんのことで、もちろん、音がするわけでもなんでもなかった。あたりをさがしたところで、べつに落ちているものはなかった。（中略）

ぼくは、あっと声をあげた。もしかすると、あの小さい黒いかげの正体は、小山に住むこぼしさまではないのか。いまでもこぼしさまが生きていて、ぼくのポケットにしのびこんだり、上着の下にかくれたりしているのではないだろうか。もし、そうだとしたら――。

――「だれも知らない小さな国」から

挿絵・村上勉

そんなことをぼんやり考えながら、あたりの草むらを見るともなくながめていた。月あかりのとどかないところは、暗（くら）くてよく見えなかった。その暗い中で、ちかりと白いかげが走った。

思わずはっとして、ぼくは向きなおった。いつも感じる黒い小さなかげと、同じ動きだったのだ。白いと見えたのは、月の光でかがやいたのではないか。ぼくが顔をそちらへ向けると、また横のほうでちかりと動いた。そして、かれ葉が一まい、ゆっくりとうらがえしになるのが見えた。それを見ていると、いきなり、ぼくのうしろで、ぱらぱらっと、小石が山をころがりおりるような音がして、ぼくのせなかにこつんとあたった。手さぐりでひろいあげてみると、青い小さなガラス玉だった。

おどろいているぼくの目の前を、白い小さなかげが、きらきらと飛（と）んだ。とうとう出てきたな！

――「だれも知らない小さな国」から

挿絵・村上勉

佐藤さとるの少年時代

佐藤さとるは 1928 年（昭和３）２月 13 日、横須賀市逸見町西谷戸（やと）の柿ノ谷戸に誕生しました。二人の姉は双子、後に弟と妹が生まれています。父は横須賀海軍の機関兵でしたが油絵がうまく、短歌を詠み、母は、姉たちが生まれるまで小学校の先生をしていました。わんぱくで、友だちと谷あいの町や按針塚の野山を駆け回り、一方では、母が揃えてくれた童話を読んで、いろいろな空想をめぐらすことも好きな少年でした。

後年、佐藤さとるは、豊かな自然の中で友だちや家族と過ごした少年時代について「大きな恵みだった」と語り、この幸せな日々は多くの作品の源泉となっています。

私は小学校五年生ごろまでに、かなり多くの童話を読んでいる。というのは、昭和三年から四年にかけて刊行された『小学生全集』を、母が全巻そろえておいてくれたからだ。物心ついたとき、押入れの奥にこの全集がずらりと並んでいて、私は手当り次第にひっぱりだしては読んだ。（中略）

これらの本を、明るい夏の日には木かげに敷いたござの上で読みふけった。冬は炬燵（こたつ）にもぐりこみ、手をふとんから出すのがおっくうで、本のページを口と舌を使ってめくったりして読んだ。

ふり返ってみると、こうして読んだ童話や物語が、私の心の底に沈んで積もり、ちょうど起き上がり小法師（こぼうし）の錘（おもり）のように、その後の私を立たせているような気がする。

――「なつかしの童話集」から

老人は昨日の出来事を忘れて、遠い昔のことをよく思い出す。やわらかい子供の脳にしみこんだ記憶は、よほど深いシワになって刻みこまれているにちがいない。空想の断片もまた同じである。ファンタジーの多くが、基本的に〝子供にもわかるような形式〟を持って書かれることと、おそらく無縁ではないだろう。

いずれにしても、私がこうした幼少年時代を持ったことは、私にとって大きな恵みだった。私には、豊かな子供時代がなければ豊かなファンタジーは書けない、という我田引水めいた持説があるのだが、もちろんこの場合の豊かさとは、経済的な意味ではない。

――『ファンタジーの世界』から

戦争の中で

小学校５年の初夏、思い出深い按針塚をはなれて横浜市戸塚に引っ越しました。1940 年（昭和 15）、横浜三中（現・県立横浜緑ケ丘高等学校）に入学。翌年太平洋戦争が始まり、父・完一はミッドウェー海戦で戦死してしまいました。学校生活も軍事教練に明け暮れましたが、その合間に図書館（現・横浜市中央図書館）で多くの本を読み漁り、自分が最も好きなのは童話で、それを自分で書きたいと、強く思うようになっていきます。

1945 年３月、勤労動員先の防空壕で卒業証書を受け取って間もなく、肺結核の診断を受け、家族と共に北海道の旭川に疎開。ここで終戦を迎えました。

中学5年（16歳）　1944年（昭和19）　桜木町駅近くの吉田橋で。右から2人目・佐藤さとる。戦争末期、桜木町の駅前広場でこの級友たちに、戦争が終わったら童話を書きたいと語ったという。

中学生とはいえ、最上級の五年生（今の高二、昭和十九年）ともなれば、いやでも日本の敗勢（はいせい）がわかる。このままだと二十歳まで生きられるかどうかと、みんな本気で考えていた。それでも、若いというのは強いというか無分別（むふんべつ）というか、いつ戦争が終わるか、どういう形で終わるか、もし終わったらどうするか、などなど、おおっぴらには決して口にできないことがらを、仲間うちではひそかにささやき合ったものだった。

今でも覚えているのだが、その年の冬、木枯らしの吹く桜木町駅（横浜市内）の広場を、数人で横切りながらそんな話をした。将来なにをするつもりか、という話題だったが、当時の感覚では、将来というのが全くつかみどころのないものだったにもかかわらず、みんな妙に真剣になっていた。

「お前は？」と、きかれたとき私は思わず答えた。

「多分、童話を書くだろうな」

「へえー」と、一同は意表（いひょう）を突かれたようだった。

――「十六歳の冬」から

もちろん中学校にも立派な図書室があったのだが、年毎に生徒数が増え、いつからか教室に変えられてしまった。やむなく私は学校の帰りに市立図書館（注・現横浜市中央図書館）に通って、手当たり次第に読み漁った。そんな無茶苦茶な乱読の挙句（あげく）、なぜか私がもっとも心惹かれるのが、童話の世界だというのに気づいていた。

いくら本好きでも、童話は小学校で卒業するだろう。それが私は卒業できずに読み続けた。

――「十六歳の冬」から

童話を書き始める

終戦後、父亡き後の家族を支えるため、療養を中止して働き始めます。1946 年（昭和 21）春、疎開先から横浜に戻り、働きながら関東学院工業専門学校で建築を学びました。そのころ、児童文学の世界では新しい時代を担う子供たちの心を育てようと「赤とんぼ」「銀河」などの童話雑誌が次々に創刊されました。そうした雑誌のひとつ「童話」に投稿した「大男と小人」が採用され、これをきっかけに児童文学者・後藤楢根（ならね）や平塚武二（たけじ）に教えを受け、本格的に童話を書くようになります。同じように童話作家を志す長崎源之助、いぬい・とみこ、神戸（かんべ）淳吉とも知り合い、この仲間で 1950 年、同人誌「豆の木」を創刊しました。

「コロボックル物語」の誕生

戦後まもなく書いた童話「失（な）くした帽子」と「手のひら島の物語」には、クリ・クルという名前の小人が登場します。このころから佐藤さとるは、小人の物語を書きたいと思っていたのです。幼い時からずっと心に棲（す）みついている小人の物語を。

1950 年（昭和 25）には、同人誌「豆の木」に「井戸のある谷間」を発表しました。按針塚を舞台に二人の若者を描いたこの短編には、戦争をくぐり抜けても変わらない故郷の風景、時を経ても輝きを失わない幼年時代への讃美があふれています。これらの作品にこめられた思いから、故郷の山を久しぶりに訪ねた青年が小人と再会するというストーリーが生まれ、「だれも知らない小さな国」の物語が姿を現し始めます。

「だれも知らない小さな国」の出版

幼い時からの空想のかけらが集まってできた小さな物語を、「心の中からとりだして、醒（さ）めた頭で組み立て、創造者に似た立場で物語世界を創る」作業が長い間続けられました。「だれも知らない小さな国」は 1957 年（昭和 32）夏にいったん完成しますが、平塚武二に「不満があるならもう一度書き直せ」と言われ、さらに２回書き直されました。翌年暮やっと書き上げますが発表する場がなく、佐藤さとるは「せめて自分の子どもには読んでもらいたい」と、自費でタイプ印刷の小さな本を作りました。

娘の誕生日を発行日としたこの本は、講談社の編集者の目にとまり、1959 年８月に正式出版。コロボックル物語の第１作が、多くの読者のもとへと送り出されました。

村上勉が描くコロボックル

コロボックル物語第３作『星からおちた小さな人』（1965 年〈昭和 40〉講談社刊）の挿絵は、当時 22 歳の村上勉が描きました。佐藤さとるから「夢を夢のように描かないでほしい」というファンタジーの創作理念をたたきこまれ、空想上の生き物であるコロボックルを絵に描くための試行錯誤が繰り返されました。「身長は３センチ５ミリ、目にもとまらぬ速さで走り、ジャンプする。イメージの元は蜂」という、佐藤さとるの設定を発展させ、強烈なジャンプ力を持つコオロギを参考に大きな脚と目を描き、ただの小人ではない、人間とも虫ともつかない神秘的で野性的な生き物―コロボックルの絵姿が完成しました。

村上勉の絵は、「だれも知らない小さな国」が実在し、今もどこかでコロボックルの生活が脈々と続いているような錯覚をおこさせます。

コロボックルのいるところ
作品の舞台

コロボックル物語の作者・佐藤さとるが生まれ、少年時代を過ごしたのは現在の横須賀市西逸見（へみ）町です。この町の裏山は、徳川家康に仕えた英国人・三浦按針（あんじん）の墓があることから、按針塚と呼ばれています。ここがコロボックル物語の舞台、小人たちが住む「だれも知らない小さな国」があるところです。

按針塚からは、横須賀港、東京湾が見わたせ、椿の森や竹やぶの間を迷路のように小道がはしり、峠の向こうには田んぼや小川、深い水をたたえた用水池がありました。現在の按針塚（現・県立塚山公園）は開発が進み、当時の面影が失われつつありますが今もここの山道を歩くとき、小人が目の前を駆け抜けていくような気がします。

佐藤さとる　按針塚で　1968 年（昭和 43）ころ　毎日のように駆け回ったこの山から離れ、横浜に引っ越したのは 10 歳の時。戦後久しぶりに訪ね、記憶のままの姿に深い感銘を受け、ここを舞台に作品を書こうと思い立つ。

その日は、すばらしい秋びよりだった。ぼくは何年ぶりかで、小さな町の駅におり立った。

戦災もほとんどうけなかったようすで、ほっとする思いだった。おさないころをすごした町なみに近くなると、ひとりでにむねが鳴った。道ばたの石ころ一つにも、小学生のぼくが見えるような気がした。

すれちがう人にも、どこか見おぼえのあるような顔があった。相手にはもちろんぼくがわかるはずはない。わんぱくなかまだった友だちの家の前では、そっとのぞきこんでみたりした。道がひどくせまくなったような気がしたが、ぼくのほうが大きくなったからだろう。

やがて、なつかしい峠へかかってきた。このあたりは、ほとんどむかしと同じだった。古びた石段のへこみぐあいまで同じだった。暗い峠（とうげ）をぬけると、けしきがひらけて、あせばんだからだに、ここちよい風がふきぬけていった。むかしもやはりそうだった。

――「だれも知らない小さな国」から